

## 11 九州・沖縄サミット開催の来沖時におけるクリントン米国大統領の平和の礎におけるスピーチ

( 全文仮訳 )

平成12年7月21日

まず、稲嶺知事、沖縄県の市町村長、議員の皆様、名前がこの礎に刻まれている人々のご遺族の皆様、退役軍人の皆様、ご来場の皆様に御礼申し上げたいと思います。

私達はこの地で過去についてと同様に未来についても語るべきであり、町華さんがただ今素晴らしい挨拶をされ、この島の学生がいかに優れているかを示されたことに対し、今一度拍手が贈られるべきと考えます。

私は、過去40年間で最初に沖縄を訪れた米国大統領であることを大変光栄に思っております。今週、G8各国の首脳がこの地に集まり未来について多くのことを語り合うこととなります。沖縄で命を落とされた人々を追悼し、それらの人々が最期に願ったであろうこと、つまり自らが被った体験や犠牲を将来の世代が強いられるようなことが二度とないようとの願いに、敬意を払うため、まず、過去について静かに、そして最も力強く語るこの場所を訪れたいと思いました。

沖縄での戦いは80日以上にわたりました。10万人以上の日本兵と1万人以上の米国人兵が戦死しました。しかし、最も深刻な惨禍は、沖縄の人々自身に降りかかりました。この島のおよそ3分の1の人々が亡くなり、生き残った人々の9割は家を失いました。これらの人々も皆、今の私たちのように、家族もいれば友人もいて、愛や希望、そして夢のある人生を持ち、もっと良い世の中であれば、順調に進んだはずの人生を送った人々だったのです。私は、本日、沖縄戦の犠牲者のご遺族が私に会って下さったことに特に感謝いたします。

「沖縄戦」は最も悲惨な戦闘でした。しかし、その追悼のために建立された祈念碑は最も強い人類愛を示しています。と申しますのも、この平和の礎はすべての悲しみに応えているからです。大抵の祈念碑は一方の側の戦没者だけの追悼を行うものですが、この碑は双方の戦没者、そしていずれの側でもなかった人々までも追悼するものです。それ故にこの碑は単なる戦争の慰霊碑である以上に、あらゆる戦争の惨禍に対する慰霊碑であり、私達はこのような惨禍が二度と人類に起こらないようにする共通の責任を負っていることを想起させてくれます。

50年以上にわたり、日米両国はこのような責任を果たすため協力してきました。我々の強固な同盟関係は、20世紀の偉大な物語の一つであります。今日、アジアが概ね平和であるのは、日米の同盟関係がこの地域の全ての人々に平和が守られ、堅持されるという信頼感を与えているからです。まさしくそのために、日米の同盟関係はあるのです。そしてだからこそ、この同盟関係は維持されていかなければならないのです。

もちろん、沖縄は、この同盟維持のために、極めて重要な役割を担ってきました。私は、沖縄の人々が、自ら進んでこの役割を果たしてこられたわけではなく、また、沖縄が日本の国土の1パーセント以下の面積でありながら、日本にある米軍の50パーセント以上を受け入れていることを理解しています。

私は、ここで先程稲嶺知事のおっしゃったことを私が確かに承りました。また、私たちはこの碑に歩いてくる際この問題についてお話しする機会を持ちました。また、私は、皆様の御懸念を理解しようと努めていることを皆様方にお伝えしたいと思います。だからこそ、私は5年前に、ここ沖縄の米軍基地統合プロセスを始めたのです。その際、皆様に27項目の具体的な約束をいたしました。これまでに私たちは、その半分以上を達成いたしました。私は、ここでその約束の実現のため努力し続けることを再確認させていただきます。我々は、沖縄における米軍の足跡を減らすために、引き続きできるだけ努力を致します。我々は、良き隣人としての責任を受け止めており、この責任を全うできないことなど米国として受け入れることはできません。

またその一方で、平和と繁栄の恩恵をこの沖縄にももたらすため、私たちが協力してできることはまだまだあります。私は、世界の人々が、沖縄を過去の戦場としてではなく、「万国津梁」、即ち、国々

の間に架かる橋、として見て欲しいと思います。そして、「万国津梁」は今週我々がサミットを行う会議場の名前でもあります。5世紀前、尚王朝の黄金時代に、この島は、アジアの全ての貿易の交通路として活躍していました。そして、21世紀の情報化時代において、沖縄は、日本と世界との交通路や門戸になれると考えています。

この1年間で、アメリカのフォーチュン誌上位500社のうち3社が、20社以上の日本のIT企業の後を追って沖縄で事業を開始しました。また、今夜この荘厳な場所をテレビを通じて見ておられるアメリカ、ヨーロッパ、そして全世界の人々に次のように伝えたいと思います。ここ沖縄は、素晴らしい場所です。ここにきて、是非沖縄が将来を築くのに協力をさせていただきたい、と。

私は、また、琉球大学設立50周年にあたるこの年に、この地を訪問したことを特に嬉しく思っております。米国が琉球大学の設立に当たり指導的な役割を果たしたこと、そしてガリオア、フルブライトの両プログラムを通して、非常に多くの沖縄の若者達が米国で勉強されたことを等しく誇りに思います。この素晴らしい両国間の伝統に則り、本日、私は、日米両国が若い沖縄の大学院生をハワイの権威ある東西センターに派遣するために新しい奨学金プログラムを設立すると発表できることを名誉に思います。我々は、このプログラムを、私の良き友人であった故小淵恵三前総理に捧げたいと思います。前総理が一生懸命に努力された、日米間の友好と理解の促進を、このプログラムが更に進めてくれることを心から願っております。

今週、森総理のもと、沖縄に集まったG8の首脳達は、最も富める国と最も貧しい国との格差や、一国内における最も富める地域と最も貧しい地域との格差を縮めるための方策について議論します。この美しい碑に込められた希望と和解のメッセージと日米間の堅固な友情は、私達が、次の新世紀において、あまりに多くの人々から人間の生まれながらの権利である喜びと可能性を遠ざけている困難を乗り越えるための橋を架けることができるという希望を与えてくれます。

1879年に、最期の琉球王である尚泰王は、首里城を去りました。王として最期に詠んだ詩には未来への希望が託されています。そして、彼の言葉は世代を超えて、私たちに語りかけています。

「いくさ・ゆん・すまち、みるく・ゆん・やがて」

この詩の意味は、「戦の時は終わりゆく。平和は遠からじ。諦めることなかれ。命こそが宝なり。」

尚泰王の詩が、我々の友情と、今後、何ヶ月、何力年にわたる我々の仕事を導き続けてくれます。稲嶺知事、知事のお言葉と指導力に感謝いたします。結局のところ、尚泰王の言葉は、私達の時代にそれを成し遂げることができれば、「平和の礎」に名を刻まれた方々に対して我々のなし得る最良の追悼となりましょう。

ご静聴ありがとうございました。

(了)